

「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」

共同利用型公募研究成果報告書

田中 良英（宮城教育大学教育学部）

研究課題名：18世紀ロシア陸軍における非エリート連隊の日常史

近年の西洋史研究においては、従来の戦略・戦術史を中心とした狭義の軍事史研究を超え、とりわけ軍隊と社会との有機的結合の実態解明を目的とした「新しい軍事史」研究が各時期・地域について進められている。申請者は、これまでも18世紀ロシア貴族を対象に彼らの日常史的動態や心性の分析に従事し、特に近衛連隊および近衛重騎兵隊のようなエリート部隊における各種人事や武官の行動様式を研究してきたが、今回は範囲をより拡大し、一般の歩兵・騎兵連隊における日常的な勤務の実態を明らかにすることを試みた。

具体的な作業として、スラブ研究センターには①2011年8月22日～28日、②2012年3月22～30日の2度滞在し、センターおよび図書館所蔵の各種資料の渉猟・講読に努めた。①では研究史の整理と史料源の確認を予定していたが、先行研究の予想外の質・量に圧倒され、これらの再確認に追われる状況となってしまった。今回、北海道大学所蔵のものに留まらず、それらを糸口にして存在を明らかにすることができた文献も含めると、とりわけ革命前の成果を中心に非常に多くの研究成果が存在することが判明した。無論、研究視角や方法論は近年の「新しい軍事史」と異なるものも多いとはいえ、それらに含まれる情報を二次史料として利用できる可能性も考慮すれば、このような研究の蓄積が日本では十分に紹介されてこなかった点も含め、改めてそれらを丹念に追う必要があるように感じられた。

②では刊行物に含まれる史料的情報の追究の一端として、革命前の軍事史雑誌「Военный сборник」（マイクロ資料）、またソ連期以降の専門誌「Военно-исторический журнал」、
「Военно-исторический архив」などの通観を中心に作業を進めた。その過程では、むしろ革命前に兵站や軍制改革のような「新しい軍事史」とも重なる問題への関心が一定程度看取される一方で、ソ連期には大祖国戦争期の前線エピソード的な記事への偏りが顕著となり、近世軍事史への視角が極めて希薄化した構図が明らかとなった。とはいえ、近年はむしろ18～19世紀を扱った成果の増加、さらには狭義の軍事史家以外の研究者の参入も目立つ傾向であり、今後の飛躍的進捗が予想される。

本年の作業では、残念ながら史料分析に基づくオリジナルな議論の展開にまでいたる時間的余裕がなかったが、上述のような過去の成果の紹介も含め、同課題について継続的に研究を進めることを考えている。最後に今回のような効率的作業の場を与えて下さったスラブ研究センターに改めてお礼申し上げたい。